

学 年 通 信 第一号

平成22年4月28日

明秀学園日立高等学校 第2学年

陽春の候、皆様方にはいよいよご清栄のこととお喜び申し上げます。
明秀日立生(白梅)の諸君。「明るく・清く・凛々しく」の建学の精神に照らし合わせ、それに適うよう日々を過ごしていますか。

「やるからやる気が出る」を実感していますか。

さて、2学年の学年通信第一号は、「何のために学ぶのか」を提言したい。
この第一号も、よく目につくところに貼り付けておくこと。

『光陰矢の如し。少年老いやすく学成り難し』諸君！思索にふけり、垣根を越えよ。



何のために学ぶのか

—未来は今現在の努力によって変えることができる—

人は意欲を失ったとき、陥ってしまう心情があります。「何のために学ぶのか」「何のためにここに存在するのか」「何のために生きるのか」…。実はこれらの根源的な問いには共通した解決法が存在します。その方法の伝授を2学年通信の始まりにしたいと思います。

予め断っておきますが、皆さんに示すのは解決法であって答えではありません。これらの問いにはそもそもただひとつの明確な答えはありません。物質に固有の値があるように、人それぞれに人それぞれの答えが備わっているように思えます。備わっているという表現はいわゆる運命論のように聞こえるかも知れませんが、それとは本質を異にします。ここで言う「備わっている」とは、偶然がいつか必然となる事を言っているので、偶然を装った運命が我々に「備わっている」と言っているわけではありません。ただどうしても「備わっている」と表現する以外、適切な言葉が思いつかないのです。

言い換えれば、あなた方がこれまでに経験したこと、そしてこれから経験することは偶然の出来事ではなく必然の出来事に成り得てしまうということです。と言うのは、現在は過去における選択の結果ですから、**目の前に現れる現実**は過去の**選択における当然の帰着**となるわけです。過去の辛いことや悲しいことも、その後採った選択が今現在の自分(必然)を作っています。過去の出来事を乗り越える道を選択したことによって、今の自分には無くてはならないアイデンティティーがもたらされる。今になって振り返れば、自分を形成する糧(かて)になっているでしょ。だから過去の出来事は偶然ではなくなくなってしまいます。もっと言えば、我々には偶然を必然に変える力が備わっていると言うこともできる。経験を糧にできなかった時、多くの場合我々は、それを運命と言って諦めているのです。現在から過去を振り返る視点からすればこのようなこととなります。

逆に現在から未来を馳せる見方をすれば、目の前の選択はどちらを選ぶにしても間違いではありません。我々の目の前に現れる事象は選択を余儀なくされるものばかりです。無意識の内に選択してしまうことが殆どですが、時に選択を躊躇する場面に遭遇します(つい最近、皆さんの中には選択を躊躇した人がいたことと思いますが)。もし、後に選択を誤ったと思うことがあったなら、それは選択を間違ったのではなく、その後において選択に付帯する努力を怠ったということなのです。選択に間違いはありません。間違いは選択した後の我々の振る舞いにあります。努力は選択を必然と成し、惰性は選択を運命と片づける道を選びます。将来は、今現在の選択によって導かれるのですから、これから起こる出来事は決して偶然ではありません。だから**未来は今現在の努力によって変えることができます**。我々は、そのことに感謝しなければなりません。

もう一度言っておきます。**選択に間違いはありません。選択した後の努力のある無しによって我々はあの時の選択は誤りだったとか、正解だったとか振り返るのです。**

さて、勉強面に意欲を失った者達がよく口にする言葉にこんなものがあります。「実生活に数学が何の役に立つのか?」「外国なんて行かないのに、英語を勉強する意味があるのか?」「もう使わなくなった言葉(古語のことです)を勉強する意味があるのか?」

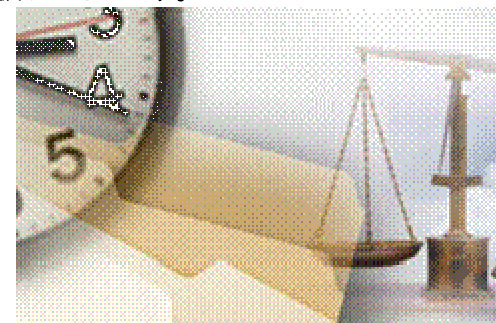
勿論、数学が実生活に役立つ実例を列举したり、字幕なしで映画を観て外人と同じタイミングで笑ったりすることの優越感を訴えたり、朱鷺だって絶滅から救おうとしているのではないかと詭弁を弄したりするつもりは毛頭ありません。後からいくらでも付け加えられる的な実利を言い募り、「ほら、意味はあるでしょ」と証明しようという試みは無意味です。話が脇に逸れてしまいますが、頭髪指導などでも陥りがちな二律背反のパラドックスによって、これらの意味の無さを証左することができます。例えば、「ロン毛」にして何が悪いのかと生徒諸君は悪くない根拠をあげつらいます。私ども教師は教師で、なぜいけないのかその論拠をあげつらう。こうなったら收拾はつきません。立場上渋々言い伏せられた皆さんは当然の事ながら腹の中では納得していない。なぜなら、自分の論理(理屈と言ってもいい)の方が正しいと思っているからです。このように論理(理屈)で相手を説き伏せる事は到底不可能なのです。自らが是とする主張を非と主張する者達の論理の前に屈することは表向きにはできても内心ではできません。「それでも地球は回っている」のです。論理で打ち勝とうとするのは、愚の骨頂と言っておきましょう。(ついでだから言っておきますが、頭髪等で毎度毎度注意を受けている諸君。私は上記のような理屈を言いません。ダメなものはダメです。ただそれだけ。いい加減あきらめてさっぱりなさい。自分という垣根を越えなさい。)

—内発的動機の再考—

そもそも、我々が充実した日々を送る限り、「何のために学ぶのか」「何のためにここに存在するのか」「何のために生きるのか」等の根源的な問いは身の内に生じたりしません。迷いが生じたとき、心が折れたとき、不運に見舞われたとき、我々の心にこれらの問いがひょっこりと頭をもたげてくるのです。ただ、こうした時は、「何ごとでもまかしてはいけません。またごまかされてはなりません。元気を出しなさい!不死身になるようにしなければいけません!」(1学年次の学年通信第2号「飛ぶ教室」の一節を参照のこと)

皆さんもご存じのように、充実した日々はそうそう長くは続きません。思い返して下さい。充実した日々は内発的動機に支えられています。仮に、外発的動機で始めたことであっても、継続するうちに納得がいき、自ら動き出せるようになった(自発的動機に変化した)とき、我々は充実感を覚えます。しかしそれは、多くの人にとって完了してしまった感慨です。裏を返せば、我々は殆どの時間を外発的動機に支配され生きているのです。だから、ごまかされてはなりません。人のせいにしてはなりません。我々の選択が外発的動機に支配されているのなら、それを乗り越えなければなりません。内発的動機が人生を一変させると言った意味がもうそろそろ分かってもらえたでしょうか。皆さんにはどうしても若いうちにこの事を知っておいてもらいたいのです。

内発的動機による選択の身近な視点を具体的に示しておきましょう。「挨拶をするかさせられるか」「ゴミを捨てるか捨たされるか」「学校に通うか通わされるか」「部活動をするかさせられるか」「ルールを守るか守らされるか」そして、「自ら学ぶか学ばされるか」。要するに、自分の意思でこれらの行動を起こすか起こさないかということです。何ごとでもやらされているという意識(外発的動機)があれば長続きはしません。シャツの第1ボタンを留めろと言われて留めている限り、その場しのぎの行動となります。挨拶しろと言われて挨拶したり、掃除しろと言われて掃除したり、遅刻すると言われて翌日だけは気を付けたり、化粧を落とせと言われて落としたり、宿題をやってこなかったら残すと言われてきたりやってくる等々、やらされてからやるようでは、何の意味も持たないのです。だから、我々は先に行動を起こすことで意味を持たせるしかない。いや、動くこ



とで意味は後から付いてくると言った方が正しいでしょう。先に動けば、いずれ我々は自分自身を納得させるに足る意味＝「内発的動機」を見出すことになります。だから、「まずは動け」なのです。

－何のために学ぶのか－

我々が善い行いことをするとき、何かの見返りを期待するでしょうか。止むに止まれぬ気持ちに駆られ、勇気を振り絞り、我々はまず行動を起こします。席を譲り、ゴミを拾い、言葉をかけ、傍らに寄り添い、励まし、肩を貸します。これらの行為が純粋であればあるだけ、我々はその意味を問おうとはしません。見返りを期待しての行為、先に意味を持った行為なら、それは「善行」という気高い行為とはなりません。「学び」もこれと同じ構造を持ちます。「学ぶ」ことに報酬や見返りを期待したり、意味を尋ねたりしては「学び」とはなりません。他人の役に立つという行為にはやぶさかでない我々が、自分のためにプラスになることを了解していながらも「学び」に積極的になれないのはもどかしい限りです。実は「何のために学ぶのか」その意味を問うては意味がないのです。実はそういうことなのです。学ぶことに報酬や見返りや意味を期待してはなりません。「学ぶ」意味を考えては「学び」は成り立たなくなってしまうのです。

たとえなりふり構わず憧れの大学へ入るために猛勉強することができたとしても、目標の合格を手に入れてしまえば、この種の「学び」は脆くもついえ去ってしまいます。何故なら、「学ぶ」ことに「目標の大学へ合格する」という意味を持たせたからです。これは外発的動機に相当しますから、真の「学び」とは言えません。入学したと同時に消え去る儂いものです。オリエンテーション合宿で、東大生の半数以上が入学後の講義がつまらないというアンケートがあると話したでしょ。あれですよ。東大へ入るための勉強ですから、入ってしまえば講義への興味が失せるに決まっています。あなた方には決してそうなって欲しくない。

先に述べたように、仮に「目標の大学へ合格する」という外発的動機で始めたことであっても、継続するうちに自分自身を納得させるに足る意味＝「内発的動機」を見出すことができればよいのです。だから、ごまかしてはならないのです。また、ごまかされてはなりません。

「学び」という営みは、それを学ぶことの意味や実用性についてまだ知らない状態で、それにもかかわらず、これを学ぶことがいずれ生き延びる上で死活的に重要な役割を果たすことがあるだろうと先駆的に確信することから始まります。学びはそこからしか始まりません。私たちはこれから学ぶことの意味や有用性を、学び始める時点では言い表すことができない。それを言い表す語彙や価値観をまだ知らない。その「まだ知らない」と言うことがそれを学ばなければならぬ当の理由なのです(『日本辺境論』内田樹(たつる)新潮新書)。私は、この考えに大きく「同意します」(この著者の言い様を拝借しました)。

なぜここに存在するのか。なぜ生きるのか。これらの根源的な問いについても同様です。その意味や実用性を考えてはならないのです。何故なら、それを言い表す語彙や価値観を我々はまだ知らないからです。ここにこうして存在し、生き、学んでいる。我々は見返りを期待し、ここに存在し、生き、学んでいるのではありません。自発的動機による「存在」「生」「学び」の中で、それぞれの意味を見出していくことになります。皆さんはそのただ中にいます。あなた方一人ひとりが見出す答えはあなた方しか知り得ない答えです。「何のために学ぶのか」だから今、問うてはいけません。それが解決法です。

正しい言葉は心の鏡、正しい禮(れい)は心の鏡

私は先ほど「理屈を言いません。ダメなものはダメ」と言いました。ですから、これ以降書くのは一部の諸君(ダメなものはダメ)を観ての感想とお願いです。一切理屈は言っておりませんので悪しからず。

諸君の中にはいまだに公然と親指をしゃぶっているに等しい、みっともない姿を人前で晒している者がいるようです。校門を通るときのみ、注意を受けるときのみ制服を正せば良いのではありません。正しい身なりは、周囲を爽やかにし、清々(すがすが)しい気持ちにさせます。お互いがお互いを思いやる気持ちの現れです。諸君の制服姿に現れているのは、我が儘や幼さです。

2年生となった諸君の制服の着こなし方を質したい。あなた方はすでに制服の正しい着用の仕方を知ってい

るので、ここで改めて細かく説明する必要はないでしょう。いつ何時(なんどき)も正しく着用してください。正門や校内で注意を受けるときのみ襟を正しているようでは、明秀生を追求する者として、あまりにも無自覚であり、裏表があります。制服の着こなしひとつにも裏表があってははいけません。明秀生として一本筋を通してください。

職員室のある1号館1階に寄贈された鏡があります。竣工は昭和62年です。それから二十有余年、本校生徒の姿を映し続けている鏡です。そこには、「正しい言葉は心の鏡」「正しい禮は心の鏡」と記されています。ありがたいもので、こうした魔法の言葉は、その必要を感じたときに目の前に現れ、意識をしっかりさせてくれます。

建学以来「白梅のごとく生きる」という精神は、連綿として受け継がれ今日に至っています。徽章(校章)は白梅のごとく(明るく、清く、凜々しく)生きる者としての証(あかし)です。この指標を見失わない限り、高校生活に意欲を失うことはないでしょう。

自分が何者かを知らずに生きていくことは不幸なことです。あなた方は今、自分がいかに生きるべきかを見出す時にあります。

ここでの学園生活も残りわずか2年です。

迷うことなく「学び」、この学園に諸君が「生きた証」を残して下さい。青春を謳歌するとはそういうことです。

－苦言を呈す／自己を否定できない精神は育たない－

面接時には髪の毛を切って臨みますよね。普段から切れ切れと言われているのに、いざその時になると自ら進んで髪の毛を切る。悲しくなるほど節操がない。但し、この節操の無さは諸君だけに限らない。政権交代を望んだ一時の民意は、一年もたたない内に政府与党の支持率を下げ、元の与党からは新党結成が相次ぐ。我々日本人はこんなにも節操のない民族だったのかとゲッソリしてしまう。今、諸君もまんまと節操のない民族の一員に成り下がろうとしているのではありませんか。

面接時には、第1ボタンもしっかり留めて、まくり上げたスカートの裾を下ろし、化粧を落とし、腰履きしたスラックスを引き上げる。我々教員が、「普段はこんな生徒ではありません」と言えないことを良いことに、その場限りの礼節を決め込むその底の浅さがなんとも悲しい。上っ面だけを気にして内面に向かわない精神。向かうべき所に背き、ヘアスタイルや化粧やシャツのボタンをルーズに外すことに執着し、個性とか自己主張とは言いつつ、実は皆同じ格好をする没個性に陥り、群れることで「自分だけじゃない」「他にもいる」ことを確認し、自分自身を乗り越えられないのがゆきを慰め合っている精神。こうしたじっくりと時間をかけて自分に向き合うことをしない精神は、自分の視線より高いものに目が向かない。つまり、上を向かない。自己を否定できない精神は育たない。そうした似た者同士が群れ、群れてまた向けるべき所から目を背け、逃避する。諸君の一部には、いまだ稚拙な魂を宿す者がいて、業を煮やしています。

さんざこれまで、いい加減にしろと言われてきたことを、いざというとき「それじゃ、合格しないぞ」などの一言で翻意する。これは外発的動機でしょ。余りにも他律的過ぎる。他律的である者ほど精神年齢は低い。つまり幼い。今時の言い方をすれば、偏差値が低い。「自律」は我が校校訓の中核を成す。改めたまえ。

学年集会をおさらいする

1. 学年目標は、学力向上とコミュニケーション能力の向上である。
2. ダイアリー2010、リテラシーノートの活用を徹底せよ。
3. 授業に集中せよ。授業開始5分は授業集中を意識せよ(意識しなければ集中はできない)。
4. 始業終業時にしっかりとした礼を心掛けよ(特に椅子の引き出しに注意せよ)。
5. 建学の精神、校訓に照らし合わせ、それに適うように生活せよ(校訓は白梅への道標である)。